

# 12の神薬と生薬資源に関する一考察

岡山県上海事務所 担当 岡野涼子

(日中経済貿易センター上海事務所)

## 訪日観光客垂涎の的～日本発12の神薬

上海浦東国際空港はもとより、中国国内の主要国際空港到着ロビーは、多くのジャパンプランドグッズを携えた旅客でごったがえしている。手にする日本からの土産品の中に、日本製漢方製剤にもお目にかかることがある。報道によると、所謂“ロコミ”(中国語:小道消息)で、「日本には12の神薬があるらしい」との噂が旅行者の間で広がっているようだ。

大手製薬企業誕生の地“大阪道修町”界隈のランドマークであり、古くから薬の神様として庶民からの信仰が厚い“神農さん”の鳥居をくぐると、すぐに「12の神薬」展示コーナーが目に入る。個々の薬品名の記載は控えるが、それら神薬の主要含有成分の多くは、中国産の生薬として古くから日本で重宝されている。

とりわけ、カンゾウ(甘草)、キキョウ(桔梗)、ダイオウ(大黄)、ケイヒ(桂皮)、センキュウ(川芎)などは、ジャパンプランドのほとんどの漢方薬に処方されており、中国の四大生薬産地“川・広・雲・貴”(川=四川省、広=広東省、雲=雲南省、貴=貴州省)から、中国最大の貿易港である上海に集荷後、日本や東南アジア諸国へ輸出されている。

## 日中相互補完関係を具現する漢方薬

上海市内にも「同仁堂」など、老舗として賑わう中薬店の百味箆笥に数多くの生薬が納まっているが、中国はもちろん、日本でも生薬を独特の製法で漢方製剤に仕立てており、人々の健康増進に大きく貢献している。

旅行者が持ち帰る土産品をはじめ、内外マーケットの様子を散見すると、漢方薬の世界でも資源国・中国と加工国・日本の相互補完、協力関係が維持、強化されていることが理解できる。古くからの伝統農法を尊重しつつ、新しい科学技術で資源の保護・栽培に注力する中国。消費

者ニーズを追求し、利便性を加味した漢方製剤の開発にチャレンジする日本の製薬企業。この両者が手を携えて事業協力を進めて行く限り、漢方薬市場の衰退を危惧する必要はないと思われる。

## 漢方薬原料生薬のメッカ江西省

岡山県と友好提携を締結している江西省は、上述の四省に匹敵する生薬産地として有名である。特に省都南昌の南に位置する樟樹市は、その名からも想像できるとおり、生薬加工と流通が盛んな「薬都」として名高い。資料によると、樟樹市の中心地に立地する“樟樹生薬市場”は、中国最大の生薬交易所の一つとして数えられ、市場の正面玄関には、1989年に歴史文化都市西安で出土した古代の薬研(やげん)を模したモニュメントがそびえ立っている。市場内にはところ狭しとフンボウイ(粉防已)が干されているなど、名実とも薬都の雰囲気満ち溢れている。

一方、生薬資源面では、樟樹市より更に約30km南下したところに、“呉城郷薬材專業種植モデル基地”が開設されており、ゴシュウ(呉茱萸)、キンギンカ(金銀花)、オウバク(黄柏)、コウボク(厚朴)などが栽培されている。

(2016年1月)